

比古婆衣

四

共貳本

大政官文庫				和書門
二册	六架	七函	三號	

内閣文庫				和書類
二函	一册	四架	七號	

内閣文庫	
番號	和 11473
冊數	2 (2)
函號	212 121



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



文庫部省

文庫部省

文庫部省

比古婆夜四の巻

伴信友稿

唱更國

續日本紀小大寶二年十月丁酉先是征薩摩隼人時禱
 祈大宰所部神九處實賴神威遂平荒賊爰奉幣帛以賽
 其禱焉唱更國司等今薩摩也言於國內要害之地建柵置
 戍守之許焉とらえたり唱更の名は事由ユエヨシ以まと詳サダカか
 系説シテ戎シさのは古事記傳ニ隼人ハ別称ノどく説イをれ
 たりも形カ不オ穩ヤ當カありぬありちせられつゝも此コごろ
 ふと史記ニ中ニ見アりたり事ハあはれに據りて考

○比古婆夜四

一

たふ説のいづれを以て試に以て法しざるは其史記
孔吳王濞傳に漢文帝の時濞が封國に在て反心あり
狀云云る下に其居國以銅鹽故百姓無賦卒踐更輒
與平賈とある踐正義に踐更若今唱更行更者也言民
自著卒更有三品有卒更有踐更有過更古者正卒無常
人皆當迭之是為卒更貧者欲雇更錢者次直者出錢雇
之月二千是為踐更天下人皆直戍邊三日亦各為更律
所謂繇戍也雖丞相子亦在戍邊之調不可人々自行三
日戍不行者出錢三百入官官給戍者是為過更此漢初
因秦法而行之後改為謫乃戍邊一歲といふなり今そ

大意戍考るに史記小のゆゑ踐更は漢世の制小邊
塞に戍卒を以て稱して唐世の制は唱更行更なり
ふとたかりと同一趣ある戍卒に稱ありといふるは
其あとの唱更もその唐制に准へて擬ひあまへ
戍卒の稱ありとぞたしえたる然るハ上小擧たる續
紀に大寶二年十月云々空載されざる前に八月丙申
朔薩摩多禰二國あり同紀和銅二年六月の隔化逆命
於是發兵征討遂校戸置吏九月戊寅討薩摩隼入軍士
授勲有差と云えて此二件を併考する小此時逆命たり
征討たむ多禰あるは畏れ十月にねらひて上は擧
て自伏せりとときこえり

○比古婆衣四

○二

たるがごとく唱更國司等今薩摩國也言於國內要害之地建
柵置戍守之許焉と載らは薩摩國の要害地
小隼人を守る押の柵ヲ建て戍卒を置むと奏せ
戎許へ入るありおの時そ柵を建て戍卒戎置
あるにかの唐制に唱更の称を擬ネびて薩摩を唱更國
と改められたる戎正義云唐張守節が開元二十年に
いるを此戎柵を置れ著せる書てそれより今の唱更と
十年ばらる後當きを時世もよく符へり三あくに
は國司の称ふれとなりたるうへをめてかく記さ
たるふて注に今薩摩國也とあるを後よその戎柵を
廢め戍卒戎置るくさまも替られるになりて舊の

薩摩の名に復カさきたりける御世もありて此紀を撰
されあるが故も今薩摩國也とおなり記されたる
なるははさき記さまあり拾芥抄改名所々部
に薩摩國元唱更國といるこれあり國も成卒戎置
れる前の年大寶元年の八月は律令の撰定成りた
る由續紀に見えれどいまは普く遵行る被接とあり
らざれば此時の唱更ハ令制の大宰府に被接とあり
守邊の防人トはら同ト唱をりし防人を
もそかみ字音のまは異國守に備へる防人を
佐幾母利ト義稱ありし備へる防人を
邊の崎々守る義稱ありし備へる防人を
其戎柵を廢める國名をも舊カ復カさきたる證は同
紀も養老元年四月甲午天皇御西朝大隅薩摩二國集

人等奏風俗歌舞授位賜禄各有差建更柵をと云えて。唱更建柵をを
より大寶二年是より先ふ二國隼人等の暴戾アたる輩
をお空く平伏ツロヒたる趣なり。故カレ以をゆる唱更の柵
伐廢ハめひ。既も令制も漸調ひて防人を遣にあをせて
國名をも舊の薩摩の復カさまたりしる後に然カるは
大隅薩摩二國隼人等云々とをちかへりて薩摩の國
名を記され。此後唱更國と記さまたるはあると
あく。これ薩摩國と記さまたるはあるは知る。然カし
あるのまてかここして。時世もさらには地誌も詳しく
あるのまてかここして。時世もさらには地誌も詳しく

古歌にあまの海のとよあるに諸説あり。そこに
はいうふれのふと或人の語らひ出たるにそよあさ
れて考るよまてのこと馬テ蛤カ瀉カめて。汝干カ瀉カめて。馬テ
蛤テ貝カを捕ふふによれる言いく。袖中抄に釋ける説をほ
あとにいはれたまどいふはらうたはよさりきとと
るありてきこえ。又まくかこといへ。説のあらはしめら
れてまどる説をも記せるをあらはしめらるは辭ジ法ホウといふ
る。然し抄の書さは假字があらにて。ふと杖をみあらしま
るもあらはしバ其言をあらかしめらるは真字と換へ

て書るもあらず。其書ありては、
袖中抄第六卷あまの浦てかとの條ふ云、伊勢は海人の
海人のまてかたのやまあみあづらへたける身成ぞ
恨むる。顯昭云、あま乃浦てうことを海人の馬蛤とい
ふ貝つものところあきあり、河平のまてかたの書る本
もあきど、多本にまてと書たき、それをつきて釋す
伊勢の海は云々、あの歌後撰集恋部に見えて、題書
ふ心よもあらで久しくとはざりける人乃ととた
は、うちけふ源、英明朝臣とあり、今在る諸本、又後

撰集の正義もあてうこと書り、
汝の干たる瀉にて馬蛤捕ふは、馬蛤かるといふ
かね先細きを二岐よ造りて、竹をつのふ細うして
すげて持てまづ、鍬めて砂の上を曳けむ、馬蛤の穴を
汁を吐出せむ、そこに馬蛤のりをさし入きて、引出
してとて、くはといるり、あさ鍬あらねど、上手を、
ぐせめても砂を搔けむ、汁をバ吐出といへり、春秋
冬とるとぞ申は、夏を馬蛤横さまふありてあきバ、捕
らむ、馬蛤はねやう穴よ、堅さ海にあるなり、
まてを、本草和名よ、馬刀、一名馬蛤、云々、和名、末天乃

加比まゝと和名抄に馬蛤唐韻云。蛭音種辨色立蚌屬也本草云馬刀一名馬蛤和名上同和名たのま前サキも伊勢紀伊周防豊後豊前肥後おどの國人よ馬蛤とるさ海を尋問ひけふにまぬ此抄お上のまづりにひるる趣と異あるこまなき成まほ其かまきる趣をとりあつ免てひをむまひその馬蛤お形状カタチの両殻合ひて細き竹筒の如く首尾少く細く平ヒラまづり長さ三四寸より五六寸あるもあり色の淡黒ウスグロよひさくあ黄赤カネを包カネまづり殻の首尾通トホまで内よ細身キあり其身お頭カブリよ中のごとく見ゆるをまづり中に口ありて殻外

お出入も此その海中にありて潮干るときを頭を上りて、豎さまに沙中よ引入てある成海人どもその干潟よれたちて、それぐ引入りたる沙上よ、小さく穴の見ゆるを求マギて、輕歩スキアレ寄カりて白塩カタレホを穴中よ入るまづり、殻を揺ウカし頭成出し、沫汁を吹出ほを候ウカひて、小鋏コクハカテラおと成をて、急ハヤ掘ホリ出してとるあり、足音高けまぬ、驚たて沙中に深く引入りまづり、たきをおありとぞ、或人此説を聞て云、今あの武蔵の汐干の頃、干潟よれり、まづり、見ひるる遊ウツりて、三月見るに、お海辺の里、お子など、おあそびが、てら馬蛤とるさ海を、はら同、安房上総、下総、然まづり、おあれ

○比古婆衣四

。六

の花あみ。但し此後撰れ歌ねわつあふ。と。と。と。書
たぐへは。ぼく。こ。乃。式。部。歌。も。ま。く。う。こ。成。ま。く。う。こ。空
書あしたるやらんも知りか。と。と。龜鏡集といふ文を。
伊勢の室山は入道が撰あり。以^テ此歌入^ル馬蛤歌^ニ甲虫類
也。或人云。まてあ。と。といふも付て。ほく形といふをい
それ。まて。瀉と可書あり。彼入道伊勢海の邊よて能
知^ル案内^ノ歟。

六百番歌合。十五番寄海士戀れ左方。顯昭の歌にも
志ほやく海士のまくうこあらねども。恋れせえき
をい。と。ね。かり。けり。と。と。め。る。あ。右。方。より。あ。ま。の。下

てか。と。ま。く。う。こ。空。云。説。あり。あ。ね。を。い。の。や。う。に。定
ら。ま。た。る。あ。り。顯。昭。陳。云。ま。く。う。こ。と。存。して。詠。せ。る
あり。と。て。い。る。説。あり。俊。成。卿。は。判。に。ま。く。う。こ。空
い。ふ。を。僻。説^{ヒカゴト}あり。由。い。それ。たり。そ。乃。難。陳。判。の。詞。長
く。さ。せ。る。解。説。あ。け。ね。ば。引。志。あ。さ。び。顯。昭。此。歌。よ。め
る。時。ま。で。も。ま。く。う。こ。と。い。ふ。説。を。是^{コト}と。心。得。たり。い
ゆ。が。こ。の。抄。よ。ち。後。に。其。説。を。更。免。て。ま。て。か。と。い
ふ。成。よ。し。と。せ。る。趣。も。記。せ。り。然。る。に。此。い。空。ま。あ。き
よ。し。の。説。を。上。は。釋。の。趣。も。か。奈。ら。ば。せ。む。い。と。ね
げ。あり。又。ま。く。か。を。と。い。へ。あ。説。も。あ。ほ。を。て。か。た。げ

奥義抄云あまを潮焼くとは潮干の潟乃をねご成
とりてまゝに集めて其志を垂きて焼くをいふさて
又其をちご成むを空の方にまたくをるを海人の
まくかるといふあり潮干に間急だていふあめ
はざりける身をおむ恨むるとち免るあり

定家卿の三代集間事抄に庭訓に父俊成卿先年春
崇徳院之時以女房内々仰云清輔所獻之和歌雜抄
此物得失如何一見可申中あまのまくうと書て
未勘と注作事也所習之説ハまてうと也海人沙中に

見馬蛤念キ搜取之尤無暇事也仍詠之スと兼と申清輔

後日傳聞此事貽意趣云々と記さきたる此事かの

歌合に頭昭のまくかとの歌俊成卿の判詞の中
よもいれれりさてあ乃俊成卿馬蛤の説をね
ろそかぬあのまくかたの説乃妄あるよしは
あともあし

上小までかこやいふとて成りね海へきあてね
此ひから明あまをさらに論ふるてもあらばか乃

清輔ぬしねみあらばむあオシカゴトの名たゝ依歌人たち
の中ももさふたぐひね臆説せらまゝるゝかれあ
れ乃書どもに見えて少あらば

齋宮女御集云海くうとに海人ねかきつむ藻塩草烟

はひのにたつぞとや君私云顯昭のまてうこといふ
をまてと家とをたごえたるはくうこといふを何を
まくともきあえに又汝をるやもやくともいはねむ
何事とをたごえむや此女御歌そ志ややくとをき
こえくは但證本を見るはし

まぐかこと書たりしをそののみ誤寫本あり此
女御集今ある本ども初句をぬまてかことあり證
本とけはし本抄この御歌は結句一本にうつぞと
るがかり六百番歌合は俊成卿の判詞をたまたの
とよかきつむ海人のをしほ草結句たつぞとや君
夫木抄ふも此御歌を載てまてうと云々結句を
たちぬとやきと一本よちぬとやきくとありさ

て齋宮女御と申すは村上天皇の女御徽子女さきて
王の御事よて寛和元年五十七よて卒ぬへり
此御歌を御集に后の宮よりあまのつをこせはか
たさよ見ぬへとて奉進給ちるを返しぬふとて裳
あどきせぬひてそ乃裳よ蘆手よて浪間よりあま
のづき出る玉もふも云々あしまあし舟あら祿ど
もあふあとの云々朝夕にあまのかるもを何あれ
や云々次も此御歌あり四首ともにあまのつよら
せて海人のうへおとりあし又藻よ裳をかぬあど
して志むてよみぬへるにてあの御歌をうぐ海邊
ぬく蟹の藻塩草紙焼く煙よ寄へて戀れ情をよみ

のへふあり。但し濱を除きて。潮水は満干ある干潟
あて。汐をやくはきたあらざむ。初句を某の浦よ
おどれあふべき哉。海人といふ言の縁よとりて。海
てあそびをたれをよくもたげぬをて。まのうか
るはき詞哉をた免ひて。よみつぐあふへあはる
べあまば。ふうくさごと申べきああらは。此のあ夫
木抄よ。家隆卿。伊勢はうみの海人たてあて。まて
志ぢし。うらみふ波のむまをあくとも。為家卿といへ
あし。れ海人のまて。あさのみやをまのふ命のね
がらへもせど。行能卿。いせ乃うみあまのまて。あそ

行のへり。くみわを汐のまあく戀つ。新六帖よ衣
笠内府いさのうみは海人のまて。あそかたつ免て。
いくなむねあぶをうわたるらむ。と見えくる歌ど
をば。たぐあて。あそを待て。といふ縁語ふとりて。馬
蛤捕る趣あをねよむ。さあよまある。ううへ
ふ。行能卿。衣笠内府は。潮汲み藻潮たる。業哉よみ
あをきあへあそ。いさのたあ。さるはあ乃女御は
御歌哉例。ふせらきたるあう。いひれよも干潟あて
そのをる趣よとみあへるを。實事あをかあむ。あそ
かあはし。

ある人いふ徒然草に盛親僧都が事我のへる條よ。或法師を見て白うるりといふ名を以てありき。とを何物ぞと人問ひけむ。さあそのを我も知らばも。何らありや。此僧の顔ふ似てむとぞいひけむとあるきり。この白うるるといふを以て我の冊子の中難義ありとて。さごある注我見ば。いりあらむといふ。おれのきを注どもをいりあり。おむもや。よりほさぬ。あつて見をくしてねがえざれむ。又

白うるる

我も志らばとある。おまはる。此問にえよ。わされて。それをちに。件の條をむらなる。まじ。そ乃盛親が。人がら我のるる中に。辨説人お勝まで云々。世をかく思ひたる。くせをのめて。よろひ自由。あつてねがふ。た人お志。この事あり。ねと。さま。放縦ホレキマある。行狀オコナヒある。由我。あおせる。おあせて思ふ。いをゆる。白うる。あまとい。の法師。お愚に癡ウケクたる。我。誹謗フシする。ふて。其を漢語よ。不慧オロカあは。そのを白癡ともいふ。我。白うる。りといひ。あせり。とた。こえたり。さて。其うる。りや。いへ。あ。神代紀よ。癡騃ウケケを。于樓該ウルクケと訓ふ。字書に。癡を不慧也。ま。と。神思不足也。あ

ど注し。駛を癡。空同言の轉まるなり。俗言に水乃の狀をう
也と注せり。ろりうろく。うろのく。など。和名抄。細魚。宇留里
ひ。又。うろをゆ。あども。ひ。へり。古。と。え。と。魚。を。一。寸。許。あ。る。小。魚。よ。て。あ。ま。と。群。を
浮。連。り。て。川。に。釘。を。浴。ひ。て。遡。魚。を。の。あ。る。が。ひ。や。れ。ろ
う。げ。よ。く。人。に。怕。を。驚。く。と。あ。き。成。童。子。な。ど。の。ぬ。や。を
く。漉。捕。て。を。く。あ。そ。び。あ。も。を。あ。そ。び。あ。り。其。が。名。を。う
る。り。こ。と。の。あ。も。癡。た。る。と。の。名。あ。る。法。師。を。盛。親。が
む。合。は。べ。し。若。狭。よ。て。は。う。ろ。さ。て。の。の。法。師。を。盛。親。が
然。名。付。た。り。け。る。を。そ。の。意。成。得。さ。る。人。は。白。う。ろ。り。と
ハ。何。あ。る。物。ぞ。と。問。へ。る。成。や。つ。て。其。人。を。も。併。せ。誹。謗

て然る物を我もあらば。を。く。あ。ら。ま。り。か。を。云。々。と。さ
を。み。た。る。ま。さ。の。言。と。ぞ。お。ろ。ろ。を。依。但。盛。親。も。
世。に。あ。り。て。こ。の。辨。説。を。聞。た。ら。ま。り。か。を。ま。さ。と。さ。ら。に
え。せ。口。成。む。ら。か。し。て。む。あ。し。
玉。ま。く。葛。と。い。ふ。を。玉。を。播。く。よ。り。あ。て。ひ。詞。あ。る。べ
し。葛。の。野。あ。ど。お。む。ろ。く。延。ひ。蔓。り。て。在。る。が。其。葉。を。よ
く。風。よ。さ。さ。ひ。て。裏。の。見。由。を。あ。り。さ。さ。ら。に。翻。る。そ。の
よ。く。歌。に。も。其。趣。に。あ。る。を。い。ぬ。あ。り。さ。れ。ば。其。葛。原

○比古婆衣四

○古

ふねきこころたる露のささくも風吹けをねらふ
へそその露の乱まこが玉茂播ちらむあ
く見ゆるによりて其を葛の葉の玉茂まくといひむか
らへるを歌詞を打まのきて玉まく葛とよみあら
へふそのあるはしまくといふ詞を蜻蛉日記は水ま
うせなどせさきうど色づける
葉のまびちてたをるを見まむ云々中むかしの書と
もに米をうちまたといへるも呪術はまく米をいへ
るより榮花物語茶花巻は加持泰りうちまきささ
く源氏物語横笛巻にうちまぢちらうちまきささ見
えふなとこれあり前の人々ぢちらうちまきささ見
状よりてとこれあり前の人々ぢちらうちまきささ見
いその露の乱まあなる玉まくといへふ證を月
清集は後京極良經公わく露をもちむて見まは浅茅原玉ま

く庭とありよけるの形又加茂保憲女集はかる薦コモに
玉まねをぐる五月雨をせちふえ人にねらふはさきの
あおも薦を刈みぎしてあるに雨の降りかかあぢと
ねる茂玉茂播くさまに見あなる趣ありあぢと
あるこさありさて葛よりあ歌を新後撰集秋部後
宇多天皇の御製にねきもあへびみくれよけをあ志
ら露の玉まく葛は秋風ぞ吹くとよまきあへふ趣あ
はあり後撰集は文屋朝康白露の吹く秋の野
むつらぬきとめぬ玉ぞちりたるとよあるね
ありむき又千五百番歌合は後京極殿公良經真葛原玉ま
く數やまさふらむ葉にねく露は螢とぶあり露のあ
がふく
は螢の光をそへて數のまさ又千載集夏部は藤原定
る由によそあうたへるあり

○比古婆衣四

。五

通朝臣焼をてし古野の小野此真葛原玉まくむあり
ありにたるあり春焼をてし葛の生ひ出て夏野も繁
くありきか玉播くばあり
あり由六帖にあり重ね載てとをふみ人あし題秋萩
小玉まく葛みうはさく我を恋そあひも思はば
萩の花も葛の延ひうあどしてあるが其露あせ
乱まかふさまに喻へてよとあせあり
も見えたるあまらをも又ねをひ合を信し後拾遺集に
惠慶法師あさぢ原玉まく葛のうら風乃うらかあし
の秋もきふあり建礼門院右京大夫集に前あは垣
わにくばもひうくあ小篠うちあびくふ山里を玉ま
く葛みうらみあく小きくが原小秋の初風新千載集

小定家卿ちたりねけ玉まく葛小風ふらむうらみそ
をてし春秋かりがねあどとえたるあをめぐ詞をよそ
わひく葛の名乃どくとあすとたこゆまゝ相摸集小
をこままく此ををこまくああるあまあきはめて誤写あり葛みうら葉
よ何ら祢ともあへらぬ野邊をあしとこそきけとと
あるも同じをこままくとよあるはめづらしさて又
此詞のあらくたこえたるは順集も前裁合は歌の判
歌ふあああもあひきれとまる花をくた玉まく葛
のまくあああはしこれもうちまのせて葛も玉まく
と云あまたる詞をとりてまくあといふよきにたま

○比古婆衣而

○末

まゝなりやたれもまむ。そののみをやくよりいむあれ
 たる詞ありし。なるはし。
 拾遺集物名部高岳相 如歌 ぬ。そやい豆と見えたるをいひ
 あるものあるふりと。人のいふふをよわさきて。うち
 つゆに考へたるやう。今世よそやい豆といふもの
 なるはし。そ我を屋い豆といふより。今世の詞ふ
 人を褒て悦ませむと。て。其を事々しく言擧ぐるは。
 不免そやまといひ。其ちの人の志うをむと。はる事を。

強てまゝむるやうの事哉。そやいたつふあどもいふ
 矣り。今の世小豆をち乃川ねのどく時く事をせて。志
 むて萌モやいて食料とをる。哉。そやい豆といふをむる
 一を。そや志豆といへふあるはし。古書よそやまとい
 此そやい豆といふ意に。あちをて。れをへむ。さといひ言
 此のあらざり。心悶と。鏡集に。鑑字の訓。ツヤシ。あり。
 此字。説文。一曰。心悶と。訓詞を拾ひ出。て。載せる。が。見え
 書。其は。漢籍に。施。た。る。訓。詞。を。拾。ひ。出。て。載。せ。る。が。見。え
 て。其は。書。此。文。義。に。叶。へ。て。訓。り。て。定。む。る。訓。も。あ。ま。ら
 づ。姑。く。其。書。此。文。義。に。叶。へ。て。訓。り。て。定。む。る。訓。も。あ。ま
 心。中。に。熱。け。動。く。當。ら。ざ。る。も。あ。り。き。れ。訓。も。あ。ま。ら
 り。け。む。あ。ら。む。此。そ。や。い。豆。と。い。ふ。但。し。萌モ。む。る。は。あ
 ふ。そ。や。い。豆。と。い。ふ。は。同。語。あ。る。は。し。但。し。萌モ。む。る。は。あ
 や。ま。も。い。ふ。は。け。む。は。同。語。あ。る。は。し。但。し。萌モ。む。る。は。あ

○比古婆衣四

○ま

ふり例をやし豆といふもさうからず。
續日本紀此中ぬる古記錯乱の文
國史を印本はさらふて諸本互に誤字脱文あまむ。其
諸本ども校合せて訂してよむべきことある中、
日比千支小を次の混む多かる。茂ふとよみくは心つ
りぬものあまむ。長曆通曆あどるを引合せて正して
讀べきあり。故己年おろ蔵てる印本茂とくして異
本とごに心算を校書し人のを此をるも借寫さるや
まばさるをたゞ其國史此異本のとあらば他の古書

どもふを考合せて訂をべくたをひねきてく。たふあ
おたござあおら。ゆつてよく訂して。校異あどいあ趣
あるものをごに書記し見むとあろざしてあ
あるやどにむあしく年老てくち茂しくこそ。此ごろ
或人續紀の中より日の干支此疑した處を。いさくり
書出して。いのに校正せるものといゆる中小更に書
注し見せきる一ごり。
續日本紀卷九印本二十神龜元年三月の下。庚申定。
諸流配處。遠近程。伊豆安房常陸佐渡隱岐土佐六國。為
遠。諏訪伊豫。為中。越前安藝。為近。とあるを。六月の下

あるべきがあくに混入せざるが、其をまづ是月の初
日五庚申朔天皇幸芳野とありて、次々小甲子日辛巳二
日三壬午日此條事残記て、次々亦件の庚申此文あり、
上小庚申朔ありて、再庚申あるべきは、何らに、今此干
支此混を考むと、拾芥抄下本に遣流人國々伊豆
安房云々と件此紀の流配處其遠近乃十國を載て、神
龜元年六月三日定とあるによりて、この月日此紀
の六月は、索系に同卷廿三諸本庚巳云々とある日を、
日本紀畧に庚寅と作りカケ、庚巳の干支配偶をべき理あ
らざるへふ、是月戊子朔よて、庚寅をあたち三日は當

まむ、拾芥抄に六月三日定と見え、るが此流配處の
條事に全符合へず、然まむ紀に三月庚申として載ら
れざるを、六月此庚寅の條小在、まむ、庚寅此庚申と
誤りて、三月の條小錯むて入たるあり、但しこの條事、
續紀の諸本はさらよて、類聚國史八十又紀畧よも、三
月庚申に係て載ざるを、ねをへむ、心と既くより干支
誤りて、三月の下は錯ひ入せり、けるを、拾芥抄よも、
他の正書格文あどより、採りて載たりけむが、ねの、
から此錯を訂を證せあり、か、乃六月の庚巳とあ
るを、庚寅の訛ある傍證せよあせざるなり

をのーといふ言此論
をのーといふをそと感賞る意の言あるを侮弄る意
小轉してものも言とたこゆふ哉感賞る意にいふの
たの言此假字此古書にみえざゆふよりてはやく或
説ふ侮弄る意のをのーを古書よ可咲を阿奈乎加之
と書る哉證といへべし感賞るうこにいふをたむのし
此畧語あるはけきむたろーをささむはけしといふる
はいをれきる説のおとたこまどよくねをへむ其
説とかりづたかこありてうちうこふあるくも後

よ又ある人々の説ふ其を侮弄る意にをのーやいふ
がととよて感賞る意よを轉していふ言ありといふ
るぞねむねを然ふあしくたこゆまど其説たろそ
かあしてたぐよろーたを今れのまぐねをひとまふ
趣哉さらに己たまるむといへさふを侮弄る意にをの
ーといふを感賞る意より轉する言あがら假字の證
あふに因きてかゝるさまよ其言よ據りて論ふはけし
てその侮弄る意にいふるをのーを新撰字鏡よ可咲
見醜白阿奈乎加之まゝと釋日本紀よ神武紀小兄猾等
を討むひたる條よ皇軍大悦仰天而咲因歌曰とある

歌詞の中に阿々時夜塙とある哉公望私記を引て阿
阿咲聲也時夜塙猶言乎加志と注をり歌詞の意を釋
けるを當せりとも記こえざれど其説ハ別本文此咲
字何るは依きて乎加之と釋ける言を志のをりに古
よて字鏡此訓と相符へり字鏡を寛平四年に撰たる
書あり公望私記を延喜の
りあまゝ類聚名義抄るを可咲をたぐにフカシととみ
まゝと啞々然をも志のよ免り此名義抄ある訓言假字
の違ひをさし
あらび旁證るを備ふ修り此書此事を本書の考に注るり啞を詩も啞其笑矣
説文も啞大笑也他此字書どをふたたぐに笑也笑自
也あど注へるふとれる訓ざまあり遊仙窟も啞々然
低頭而笑るとりめ

り啞を啞字さて咲を笑と同字よて唐韻に欣也説文
の古體ありさて咲を笑と同字よて唐韻に欣也説文
喜也喜也喜を釈古も喜樂増韻に喜而解顔啓齒也又
嗤也嗤を玉篇哂也哂を正韻微と注るり又詩も顧
我則笑とある哉毛傳も侮之也あどを注へりそとは
喜而解顔といふる趣此言より侮弄る意ふも轉せり
と記こゆるを其意得て皇國言にとりてえれ乃づ
かられわのさる言のひあるふあをきて乎加之
字訓ある修し今昔物語集廿二卷に房前公の事哉
此大臣ヲバ亦可咲門ト申ス亦河内ノ大臣ト申ケリ
其レハ河内國澁河ノ郡田ノ郷ト云所ニ山居ヲ作

リテ微妙ク可咲クシテ住給ヒケレバ也。真字の傍に訓假字を本
書みをおらば全篇成よみごとく其意を得て例よ
より訓るありさて此公ハ天平九年五十七歳小く
薨たまふと見えたる可咲も感賞る意の言ふて同書中
然書ふがあほあり。に檜皮葺屋いとをの
言ひありまゝ同書同時平大臣取國經大納言妻語中
可咲キ事共語り奉リケル次ニ平中云々大臣心ノ
内ニハ可咲クナム思ヒ給ヒケル乃事あり見え
たる上ノ可咲も感賞る意のをいくゝて下ある
を侮弄る意れをいくゝありかく同字同言成あらべ
用むても事の趣によりてれのいから混ひあくわの

是れこゆる成るても知るべきあり。真名伊勢物語有
乎見而とかけず此書も假字違もある書あつらさ
ぐに古きうたがまもあつらねむかへへの證とをべ
しさて又靈異記の序も後生賢者幸勿強と書て訓注
ふ幸ヲ加ヒクモとあるも幸字を侮弄る意は叶
ふあり又蜻蛉日記小みちのくふをのいかりあ
る所々成繪よかたてててれがりて見せぬひけれむ
みち行く乃ちのの嶋よて見ましうむのふはくし
のをのいからあしと罔にひびのけてよめふも感賞
る意れをいあり。但し此日記ある歌も乾くを河伯
むの雅しとがむほきにあらむべし。まゝ曾根好忠集に
えよむねとあく急む梅の花をこそ我も成のいと

折てかゝるむきと載たるふ。此集の首詞ハジメは花の忍び
るをみまむ。誰もをのしと見るらめど。人をかゝあき
かむをほく。我をはかあき言コトをたこしねきて。云々
といふるも。件の歌と同趣。詞もて。とをも感賞メダシの意
をのしに之。其を忍むにかあむをせたるなり。さて
忍むを心ふ免で。成のしとねをふあまり。顔にお
らむれて。にあやのある成の多。續紀淡路廢帝卷に記さむ
たる藤原仲麻呂を褒賞たふひて。押勝と名を改賜ひ。
姓中に惠美二字成加へて。藤原惠美と賜する事。成水
鏡の忍みといふ姓も。御覧むるたび。忍ましくねが

をとして。たまをほろとぞ申あひきりし。と云えたる意
美あねよて。其忍むあよりに聲を出ををわらふとい
ふ成。其忍むもわらふも。侮弄するうに轉してを以て
るあ。故咲字成ヲかじとも。工ムとも。ワラフとも通
はして訓來するあり。可咲を乎加之とよめるを。上よ
又笑を名義抄
又工ムとも。和ヲフとも。よみ字鏡に志の忍を今此俗
和良不々よらて。今も然訓きとまり。
おも侮弄アハナツの意のかたに忍みをのしといひ。さらふも
ねわくはさるるのこも。い多忍まば。またらちしくきこ
ゆふあり。けふをかあしといふも。そと心よ志とて懇ネモ
切コトなれをふ意。忍言を忍成轉して。悲哀むるうにのみ

いむをいむを深く愛する意の言ある残惜むの
たふ残みのあがごとくた例小同じ志のれを感賞る意
残をのりもかの可咲残假字によりて乎加之とさざ
む法しまあや感賞る意にをのりといる言れ古
たそのに見あよりたるを伊勢物語よいさうとのい
とをのりげあまけるを見をりて又聲ををのりうて
ぞあをれふ歌ひやる又い空かしくあく残りかりた
まひて使に禄給ふまけり伊勢集の首残日記文よ前
裁のをのりかまをれむ洞物語俊蔭巻にをかりうれ
もしろいあどなほありあまら残後のあみよは數志

らばわかくはあふ詞とあまり

安米都知誦文考

ある遠き國人の源順朝臣家集にあめつちの歌とい
ふがあふを空あめつちわしそら云々と音残かた
り残はくしとの危たる古文残ありしと志るく其
を考てきたあまげありとたこゆあ由をくましく考
出たる説ありそこよをいあふり見つあといひれあ
せしあにれ乃き既にか乃集残よみ見たる時を一を
ぢたてきるあこのあのりにきむとれちへ海時よて

あべて歌どを小心いさざりければ、そ乃あ免のち
の歌、以のあるとあらむとまでをたげねも見ゆて、歌
ぬのあべて歌よ似む、以のあまをさばかりは、さ
あげあるよあとのみねをひてうち過ぐりあれたあ
ふら後に假字本末といふ書記する因、うの物語
に手本を書さま残ひるるところは、詩にあらべてあ
めつちといふあまの見えるあは、さくひをたあ
みさる誦文のありしよやときさゆるのさも何あに
ありきて、か乃集のあまつちの歌、た事の心、ううび
つれど、傍^{カク}た事なれど後よこそとさしねきこりつあ

が、いひのうち念まてあまけり、其考説、以のままわ
し、ゆいでとく見せてよと答や、あつあが、年月經ふあ
まどねとせぬよ、老らく乃まちどほにねがえて、か
の集と出見てのまあれ考合するよ、以をまわし
たこま、此いづくるまよ、くは書記し、試み、以後
ふかの人、た考をみて、さし同トからむよ、此考ハ捨
け、かまよ、くむ隨ふ、又のさみふえらむあを
せたら、まよは、さ、たひを考とをある、さくや、とま
まかくま、れ例のこ、ろやり、れをさびにあそ

天保十二年正月廿七日

○比古婆衣四

○五

源順朝臣家集云

此集三十六人集集と歌仙家形も

ある詞あり又誤字脱字れあるを今校へ合せ
て誤と志るたをよきをとりのよきとむさど
めがたきた右旁に書そへ又左旁よは
まゝ真字校書そへて讀やすからむ

あめつちの歌 四十八首

もと藤原有忠の朝臣藤六あむと知海へへあ

まがまをのみかざりふそ乃をど残を忍たりあ

まはしもにをす忍とたをもわのちてよ知る

春

あらしどとうちのへをらんをやま田の苗代水よぬ

れてゆくふあ

然もたる小雪まををなくなりよけよ今日こそ野邊

のイ
よ若あつみて免

はくを山さける櫻は匂ひをむひまでをらぬどよそ

かあらむ

千くさふもやころぶ花の匂ひの雨いづら青柳ぬひ

糸をぢ

わのくさ明石は濱を見こそせむ春の波にけいつ

ふ船は布

志げくさへ梅は花のさ志るたの雨よぬまどとき

てやかくま

そろ寒み結び氷うちとけていまやゆくらむ春は
たのぞぞへ冬夜雨ふりまじり
らよえのまきくもかきふし秋は野のそえにけるの
蘭小山田のちらい
明さ布の山はちみ
夏は原は有忠の朝臣藤六おむり
山を野も夏艸志げく成にけりあどちまどりたやど
たのさりや
待人を見えぬを夏も白雪や猶あり志けあこり乃志
らやま
うこ恋に身をやきけり夏虫のあをれこびりた物

浅ねそふの
ちのふも思むのけてちゆふだをた賀茂は河波立
よらドやを
身浅つ免ば物思ふら小郭公かき乃みまどふ五月雨
たやみ
祢をふのみまどあらしまねあやめ草人を恋ちよえ
こそちあまね
たまよよりひ乃るせどよもゆらなくふあさくひむ
あをねやぬさにちこ
庭をねむやあめておひて荒にちりからくしきだふ

○比古婆衣四

の七七

口つきななり其の中はあまのりさまに集の首に人九集と
おとるに所はたてまのりさまに集の首に人九集と
十餘の国名を撰りて書きたり同
少口を伴ふもの諸國の歌を撰りて書きたり同
人九云々との書系を撰りて書きたり同
志ろ書る朝臣の袋草紙に公卿の名を載せたり同
まろ清輔も朝臣の袋草紙に公卿の名を載せたり同
され入るもれを乃の袋草紙に公卿の名を載せたり同
十六入るもれを乃の袋草紙に公卿の名を載せたり同
たりそ入るもれを乃の袋草紙に公卿の名を載せたり同
り侍ふかへ新拾遺と集戀部の人此乃歌の撰りて書きたり同
ふあかとれあらむさふろふとあれ見えたり同
まはかれあらむさふろふとあれ見えたり同
は又字治られ遺物を今も心づかぬ藤六とれたり同
ありけり入るに今も心づかぬ藤六とれたり同
ありけり入るに今も心づかぬ藤六とれたり同

どふ家あふりて歌よみあへうさや藤六むこそ
ま阿弥陀とそよみたりてふゆさ乃をバくあよ
ぞ云々藤六輔相良朝歌合ア獄前由美之獄一八獄前出
菊詠一首云々輔相良朝歌合ア獄前由美之獄一八獄前出
令詠一首云々輔相良朝歌合ア獄前由美之獄一八獄前出
免之云々あまの位あき家門の考あはら官も藤六と
は藤氏れたての六位あき家門の考あはら官も藤六と
名のりて異さまある行る寺本れ歌あどけらみら藤六と
傳れ部に藤六の巻と見たり和寺本れ歌あどけらみら藤六と
心ゆるあめゆの歌と見たり和寺本れ歌あどけらみら藤六と
めつちの文を一とす次乃まに歌毎の起句
の上も多てよみたりける残順ぬそを不競ひて

○比古藤衣四

○世

さらしに其を下を起句の上と結句の下とふを急て四
季と思恋の六題に分ちてをみぬるあり。然志ひて
るが故に歌ままとしこれ集の雙六番の歌これ有
の古本に載る此ぬよ集の雙六番の歌これ有
患はみは書けらぬに堅横より廻らしてよみと
形よ歌詞を書けらぬに堅横より廻らしてよみと
乃よ歌と次は田畦形にてあり。これ書きてよみと
よむは故のせあり。尋常の歌口も似てよ
まれたるが故にぬき尋常の歌口も似てよ
其よりあはれぬてよむ尋常の歌口も似てよ
ら下は書そふ結句は下書けらぬ見よにかく此
下は書そふ結句は下書けらぬ見よにかく此
上は書そふ結句は下書けらぬ見よにかく此
あめつちぢりそらやまかをみねたふくもきりむろ

あけひとみぬうへを急ゆわさるれふせよえの急を
あれわて。然る小恋部えの位もいをて云々。これふる松がえ
と有て次よのありあく云々。そ乃次に又えもせのぬ
云々。山をつくむ亭とありて。四十七音の外にえもト
歌一首ある。相摸集なる此あめつちを急る
歌も。然る次第に見えたるがうへふ。其歌どもハ下
にらふ。此順集の歌此題の下に四十八首ともあねむ
全文よえもト二川あふ合へり。さあを以のあるこ
とふ。さらしに心得がさし。志ひてたをけて以を急え

○比古婆衣四

○卅三

一くハあめつちわしそらといふごとく二音びく
 終へて四音を一句として唱へむるを四十七音よて
 を一音足らざれば其句残るゝのるむとしてえ音を
 一つ助へて唱へあまたるにをやらむかへをく
 心得ごとたことなりさて又端書ハレガキにあめつちの歌と
 書るはあめつちと称ふ文を首カミと尾シモとよむ急てと終
 系歌といふ事ありあめつちくもきり云々といふ歌
あとなりいろは歌を昔の今様といへる歌とを
風あり委イき事を既に假字本末に論るりかくて又
 相摸集よ云花山一條の御
 あるところよ庚申の夜あめつちをかみしもふと

とむとてよほせー十六首

春

あさみどり春めづらしくひそあかに花のいろよほ
 くまあおのあ免
 つきもさぬ子の日れ千世残君のためおひむきつき
 む春北山みち
 わるよりは乃どけき宿の庭さくら風のおくろもそ
 らにまくらし
 そ乃のさゆくへあらしむく春あらむ関を忍てまー
 春日野のちら

春日夏のあはれちりやうとふも
やどちのた卵の花うげを波かきやれとひやらる
雪の志らむは
かさらむぐをりみあちてそ時鳥きくおらたふあ
のぬこゑをば
みしまえの玉江れまこも夏ぐりにあげくゆきうふ
をちこちれあね
たぎのせよよどむとたあくうそぎせむみぎを涼
たぐふ乃あごりに

秋歌 闕

冬

むしの祢も秋をたぬまは草むらにありぬる露れ霜
雪もふあろ
おのちもる時雨むのり乃あるゆきは軒北のこまも
あらしと^{こそ}思ふを^{けれ}
えこそぬく冬の夜ふおく祢ざめりてゆえまさるの
那袖乃らわあれ
えごさむみりえねふ雪れきえせぬむ冬と見るのあ
花のとたを茂
今按るにあめつちた文を歌の首尾に^{カミシモ}を急てとるむ

よむ二十三首に一言餘多り相摸を其中三十二言を
得てよめぬが今本小秋歌四首缺て十二首あるあり
此の他の人のよみたりあるはし順集あるあり
書よ有忠朝臣と藤六と二人かくて其十二首の首尾
よまればよき由るえたりかくて其十二首の首尾
此音成書はらね上よ奉たる順集ある全文よあて
其を字を圍みて別ちよふにやくはごや

あめつちわしそらやまかをみねたに缺四首むろ

こけをとの歌本よこのちもる云々あらしと思ふ

あさうらうへに結句の意もとわりてきこえはさふ

ひといぬうへを急ゆわさるねふせよ

えのえをなれわて

かゝれば順集と文の次第は異あると又連語の異あ

ふところもありとを見ゆまどとや同文あること知

るは洞物語ウツホ國禪カニふ仲忠は書て孫王に奉まる御手

本は書ざま成以するところに春の詩夏は詩あめつ

ちとらえするも此あめつち乃文此事ゆるはし但

物語本どもあめつちの下にその字一つ標まり或校

本にあきぞよた本書成よくとみまへて知はし

此物語も天徳は頃作たるを乃ありとよゆまは順ぬ

し此みさのりにねまは頃あり一華堂切臨が源義

源順ぬの作ありと天禄元年よ源為憲朝臣の著

さきたる口遊クハスサマに四十七音此誦歌を載らきて其詞を
いであつむるれをぞきこめすと云々と長歌のさま
よよみたる乃ありこの歌を別る下に注を添へ
今按世俗誦阿女都千保之曾羅也万訛説也此誦為勝
と見えたるをこそあて元年の口遊志るされたる天禄
當まりのちゆるたおふ此誦歌もそのかみ此あめつ
ちの文とくもよ世に行なれたる事と志る彦一
又加茂保憲女集に頃相摸人ありよむひ星の以空ツラま
くわと云路此あしと夕ツラなきばあらねむうたこと
もあらむば以まをたまドといふ空ツラもあくまき逢
ふ曉の涙をねとしたる露をあつ巻てうけおふみ
をのねをすめけるよりあむ河めつちわしそらとい

むけるをさよはあけるといふ言海もあそこらあり但
此集れ文のきさま拙あげてとわりてきこえがと
たところ多しあくよあめつちれ文の事をいへる
をとかとみふ證とを添へそもく此あめつちの文
を千字文あどいふと乃々さまにあらひて作するを
たふしてあめつちよりくもきりといふる近事
あねをむろ天こけ地ひといぬ雲うへ霧と聯らねとあ
とせむう室こあげ昔なりその次あるゆわさるより以下
をあふ事ともたこえがとあひてをてつあてよま
ばよみもしめるをれど河ありよのこをにいたあね
残上よ引出たるがおせくをやく口遊おもそれよ載

○比古婆衣四

○世

ら其考法誦歌と比べても劣さぬに論をねとす然
るにそののみさむありせ々も唱へられたりけむと
とあそあやけき

太為余歌考

太為余歌ハ四十七音成詞ふとのへく長歌れさま
誦む法く作するを乃ある成源為憲朝臣の口遊クキスサニ此
中此書籍門に載られたるこの口遊れ本書ハ尾張國
三年の古寫本を摹して前須れ真福寺に蔵る弘長
口遊序竊以左親衛相公殿下第一小郎小郎君名松年七
歳天性聰敏中然猶誦習之餘或有遊戯々々之裏間有歌謠蓋是
矣

年少之所致也彼韓槽帶刀之歌優則優矣終非吏幹之
備也難波内豎之誦妙則妙矣豈是朝廷之儀哉是以經
籍之分門中載之說可用朝家難拋間巷之類勒成一卷
上賢郎其詞或歌欲令九郎九郎於心也其體或直欲令
遊惣而冬言之二為小郎而作不為他人而作之也於
于時弘長三年二月廿七日僕夫源為憲序とあり與書
少加愚筆畢と記せり序ハ左親衛相公殿下と攝政
を公卿補任尊卑分脈此藤原系圍等に據りて考ふる
に攝政從二位右大臣兼左將藤原朝臣伊尹公謚謙
徳公あり第一郎ハ大臣兼左將藤原朝臣伊尹公謚謙
兵衛佐從四位上親賢朝臣に當り右此本書古筆と
以て誤寫脱字虫損ふと多くあは誦歌と然あ
を誤字は本書に臨むる字體が趣成多く見合せ又其

○比古婆衣四

○世

轉訛戎推考へ、彼此考訂してあるに、擧げ、本書に誤脱
かどを、其字下、分注して、後の考ふ備ふ、かくて、其歌
詞を考るに、あや其意、く、のひて、を、た、え、さ、ま、ど、も
と、より、か、ゆ、歌、あ、ど、作、ら、む、事、を、以、て、難、き、わ、ざ、あ、れ
む、其、心、志、ら、ひ、し、て、た、ほ、う、た、に、よ、み、と、ち、て、あ、る、は、し、ら、ぬ、
さて、此、を、い、ま、太、為、余、歌、と、い、ふ、を、伊、呂、波、歌、と、い、ふ、に
倣、ひ、て、あ、る、

九雜曲 書籍門序二卷中分門八曲中載曲九
畧誦 誦歌此上にのく別行は書べき目あるを

太為余伊天 行の書上頭歌の上、行れ上頭の分注乃左
支美女湏止 本書美を差と書り安佐利於比由久利を
言の句、調へ、音、字、本、書、の、詞、を、考、へ、て、あ、る、を、今、あ、く、に、補、へ、て、七
補也末之呂乃 本書と作、り、字、知、恵、倍、留、古、良、倍、字、本、書、の、上、に、毛
波保世与 与、字、本、書、と、書、る、あり、て、心、か、く、の、ど、衣、不、祢、加
計奴 祢、字、本、書、と、書、り、謂、之、借、こ、乃、六、字、分、注、あ、り、之、借
今案世俗誦阿女都千保之曾羅也 阿、女、都、千、保、之、曾、羅、也、阿、字、本、書、と、書、り、食
里如とゆ羅也 万の三字を、本、書、訛、説、也、本、書、説、を、此
誦為勝 誦、俗、文、の、あ、め、ど、あ、乃、太、為、余、伊、天、云、々、の、誦、勝、へ

○比古婆衣四

○梵

たりといひ
 太為余伊天多田井小出であり奈徒武和礼遠曾多菜
 摘む我をぞあす支美女湏止多君召をとあり安佐利
 於比由久多求り追ひ行く也末之呂乃宇知息倍
 留古良多山城のうち宇知の地醉へ多子等あり毛波
 保世与を藻干せよ衣不祢加計奴多え船繫けぬよて
 えハ船残曳く聲あふ残雜詞のおとく加へく詞をと
 とのるより多たこ也一首此意をささるふとわア
 もきあえざれど為憲ぬ乃論を多たるがどくあめ
 つちれ文よはひさく勝れりといあべ

玉蜻考
 萬葉集の歌ふ玉蜻蜓玉蜻珠蜻あど書るを前の人々

加ギ口ヒととみ来まくと蜻蛉をかギ口ヒといへる
 どのをを夕でかギ口とよむはくおもあるよ一あ
 る浅いのむとは其まづ本草和名よ蜻蛉一名諸乘
 一名胡螯一名即蛉一名狐梨一名阜螽一名青亭一名
 胡黎小而黄一名赤卒小而赤一名絳騮一名赤衣使者一名
 赤牟丈人一名青蛭一名廬劉和名加岐呂布とえ
 呂布の岐濁音によむべ其下と攀る古事記よ加
 藝漏肥とあるみ准へて決むはさて此本草の漢名

○比古婆衣四

○甲

類抄よを引載あり。萬葉に陽炎を蜻蛉火。蜻火あど
火字を加へて作る。残れもへむ。そののみ加岐呂布残
加岐呂布まゝ加岐流ともひひ。そぐ中の一。種。玉加岐
呂とひふがありて。其を玉加岐流とも呼へりと知ら
まゝり。然るも倭名抄。蜻蛉。本草云。蜻蛉一名胡螯。和
加介釋藥性云。一名螂蛉。兼名苑云。虹蛭。一名胡蝶。蜻蛉
是也。と注さきたるを。加岐呂布といふは古名。よて當
時あべて加介呂布といふ。する小あをきて。注さきたる
形る。ほし。醫心方よ。加岐呂布。又加太千。又加介呂布
と注されり。堪囊抄よも。蜻蛉といふは。大小のどん

ばうの惣名あると云。り。さて萬葉に玉蜻蛉。玉蜻あ
ど書るを。夕。下。カ。ギ。口。とよみて。今俗よヤン。と
その形。あ。ほ。し。倭名抄。胡。黎。一名。胡。離。蜻。蛉。之。小。而。黃
鈴。之。小。而。赤。也。和。名。阿。加。無。波。と。二。種。本。草。和。名。呂。布。の
中。よ。呼。別。て。る。名。を。注。さ。し。り。此。二。種。本。草。和。名。呂。布。の
あ。べ。て。加。岐。呂。布。と。よ。免。る。あ。や。止。又。二。種。本。草。和。名。呂。布。の
し。袖。中。抄。よ。あ。き。ひ。と。ハ。蜻。蛉。あ。り。又。二。種。本。草。和。名。呂。布。の
り。さ。て。今。の。俗。に。あ。き。ひ。と。ハ。蜻。蛉。あ。り。又。二。種。本。草。和。名。呂。布。の
む。恵。無。波。を。訛。れ。る。も。ん。ぢ。う。の。大。あ。る。我。の。名。に。呼。ぶ
ら。る。る。な。り。さ。て。其。類。此。中。に。鬼。ヤ。の。名。に。呼。ぶ
と。は。頭。の。大。あ。る。目。お。め。あ。る。の。透。徹。り。て。玉。れ。お
と。く。目。よ。た。ち。て。見。ゆ。る。故。よ。玉。カ。ギ。口。と。呼。ぶ。る。形。る
ほ。し。等。し。の。奥。大。あ。る。も。小。さ。き。も。頭。目。の。顔。を。水。目。あ。た

比古婆衣四

聖

ちて見ゆるものあり。俚言の物の状を譬へてや。の目此如しといふ。五月五日埋蜻蛉頭。于西向戸下埋。三日不食。則化成青真珠。といへ。頭は頭目。の貌。よ。童のや。この頭を撮取て。青玉あり。と。ひて。歌どもを。合せらる。か。思。かくて。乃。萬葉。見。歌。の。頭。に。數。の。字。注。ぎ。る。は。互。見。合。せ。お。と。て。考。ふ。一。玉。蜻。髻。所。見。而。往。兒。故。余。の。句。朝。影。は。身。あ。ぬ。り。

⑤⑥⑨⑩⑪の歌は、蜻字を用ひたり。万葉三卷十

卷二陽炎。蜻火。九卷に蜻蜓火と書て。蜻蜻蜓と。もにカギ口。小當て。用ひたり。そを下は。擧るを。

互小見あをきて證と。ほ。ほ。

②玉垣入風所見而去兒故余タカギルホカニニエテイニムコユニニを獲載るは。玉タカギル同歌

③小多万可岐留タカギル⑦小玉限と書ふは。ちりて。相

證して。あ。乃。玉垣入を。タカギル。と。よ。む。ほ。但

音に借用ひたり。集。中。に。例。あり。は。萬。葉。二

卷に蜻火と書る。或本は香切火と書るも。同例

小通はしり可証と花信（別はひの事下）
 三 多方可岐留波吕可尔美縁互伸迹（師古由惠迹此靈異）
記上卷第二縁にえて一二の句をみ
 四 玉蜻蛉髻髻所見而别去者（万八卷三十四丁）
万九卷三十一丁又蜻蜒火と書て蜻蜒をカギ口に當
てし書互に證とほべし
 五 珠蜻髻髻谷裳不見思者（万二卷三十九丁）
以上五首蜻蛉此中空飛さまにたりて髻髻ま
た遙よあど心可証とほべし
 下此詞まで應たより

六 玉蜻夕去来者（万十卷五丁）

七 玉限夕去来者（万一卷廿一丁長歌）

右二首蜻と限と同言の証上ふの可るがあと
 一 蜻蜒を夕にあむを蚊あどを食をむとて多
 く中空飛免ぐるものあれむ然以可るまで夕
 さりにあけつあまくら辞あり

八 玉限石垣淵乃隠而嬖（万十一卷十三丁）

九 玉蜻石垣淵之隠庭（万十一卷三十二丁）

十 玉蜻磐垣淵之隠の恋はく在るに（万二卷卅七丁）

以上三首蜻は水上に集たて萍あどに下りたり

飛免がらるる乃あるを此を磐垣此淵に在るる

を云むて人目の遠たは譬へきるあり漢籍坤雅

露六足四翼其翹輕薄如蟬盡取蚊蠅食之遇雨即多好集水上款飛一名蜻蛉

① 玉蜻直一目耳視之人故余万十卷五十九丁

あは蜻此空中残須史の間は飛過たるさまに譬

へきるなり

右對合せみてかぎ口フかぎ口かぎルまると玉カ

キルといふも同名を轉し呼へるなるはきあ

残知るは

さて此虫をかぎ口フといふ義を春日日影ふよりて

見ゆるかぎ口ヒといふはへきる名あるはさてその

かぎ口ヒといふは廣野あきるて春の日に影ろひて

中天は起昇る氣の見ゆるをいふ名よて万葉集よ

ぎろむのとゆる荒野かぎろむれをゆるる春るあど見

えて漢名陽炎遊絲野馬あどいするあまは當きり後

世よかぢろふといふあれあり寛平御時后宮歌合よ

ときハ流る水は趣を甚しくいとよめると月影

の流水は流る水は趣を甚しくいとよめると月影

景あは陽炎の實はさて此虫の多く中天を微よ飛ちあふ

さま残陽炎よあどへくかぎ口ヒといひまるとかぎ口

ともいひ其をまるとかぎルとも轉しいゆるよてか

○廣野を殊に陽炎の起つそのあり。此歌もカギロ

は蜻字茂假借あり。同卷四十丁同歌或本

○香切火之燎流荒野余。同卷四十丁同歌或本

あはカギロヒをカギルヒと轉し以るふて上

以るるごとく虫の名も通なり以るふと同例あり

○蜻蜓火之心所燎管。万九卷三十四丁長歌

カギロに蜻蜓みよみを借り用ひたるなり。陽炎此

をゆとあけらるまくら辞あり

○迦藝漏肥能毛由流伊幣牟良。古事記履仲天皇御歌

此を履仲天皇難波大宮よて大嘗せさをるる時

○御酒を沈酔ひて御眠まをるわど。弟墨江中王天皇

茂弒せ奉らむとして大宮よ火を著るる茂阿智

臣さあがら御馬に乗せまひて倭國へ逃まひて

まゆし免奉りけふ間夜入りて河内國埴生坂よ

至ましく難波北大宮の方を遙に見やらせぬふに

おほ火氣れ見えたりけむ埴生坂朕が立見まバ

迦藝漏肥のそゆふ家むら妻が家のあしりとよま

せぬる御歌おまありさてかくよるせぬるるあ

難波の火氣れ遙し見ゆるに。雲焼あり山氣ゆどの

臨ろひてえたる茂陽炎よるとるさせたまふ

○比古婆衣四

○異

○かぎろふ哉のげろふとひるほとは倭名抄にそえ
 て上よひるるがごとくあるに中むろよりカゲ
 ロフといふはえはら一くさのも乃よのみうつ
 て呼ぶのごまぐありて今よれよべり。和歌童蒙抄
 に藤原範兼卿の著さまふ書あり。あの人あり鳥羽
 崇徳の御世に頃みさかりよれま志く人あり
 かあろふ哉と我黒たとうばうのちひさきやうあ
 るものありと見えたるごとく。蜻蛉を林逸節用集
 草和名傳抄よ。止ム波字。又加計呂不運歩集撮壤集
 どんどうの惣名今あべとんむうといふは大小
 ありといふ。今あべとんむうといふは大小
 中の一種。殊に細くチヒサ小くして黒たが秋の半ごろ

よりいで来て中空よ飛ちろふとたのひやカサ微よむ
 らひらと見ゆるのあむのわどに飛去るもの形
 正此を形畫ハをさく見えあは。朝蔭夕暮あどに
 出来るものあまあ。江戸みて兒童あどは。かぬ兼
 好が徒然草に。世間ヨシナカのあはた譬に。かげろふの夕
 昼をまち云々といふ。あが如く。兒童形捕て虫屋
 お入せ置くを見ろよ。とあくむるわどに死ぬるも
 のあり。新撰六帖に。かけろふ。衣笠内大臣。夕くれの
 あき世ありけり。左大弁。光俊。あまあり。山ねろ
 ふくゆふくれ。あき数まさる。あまのかけろふ
 源氏物語。蜻蛉巻。薫君。あまのかけろふ。につくく。思ひ

○比古婆衣四

○哭

はぐあがめあふ夕暮上は薫君のさまをいす
りて夕のげよあるまは花のむもとく御前此草
むらを見とふひを乃天のみあをれあるに中よ
就ひて勝を断ふる秋は天といあをれあるに中よ
ぬ頃のかろふのそれをのりげふ飛ちのふを何
文ありかろふのそれをのりげふ飛ちのふを何
言とて手よをどらまばままむあま行るも志ら
どたえしかろふあふあきうとまのむとり
おちぬふとあやといするこまあま但意刺この歌此
よ見ゆる陽炎のあゆ虫の名よもそ乃さまあふ相
かよふ趣よほれあふおよとまのへてさて歌にひ
きつづけくあるうあきかまのまの獨ごちの詞は
そ乃心むえをあらせてとあやの地乃文と書とち
免たふいひをらばたくみ又あ地乃文と書とち
こえとる和歌六帖よ世の中と思むしあものをか

ろふのあるうまきの世よこそありけはあを
をら陽炎によきてよめあり金葉集よ懐尋い
をいつと思ひたゆみてかげろふ此のあろふやど
の世をひ思ひたゆみてかげろふ此のあろふやど
炎をひ思ひたゆみてかげろふ此のあろふやど
にありて見えばありぬあ我のりて蔭後持歌ども
ふそはら世のそあれき事にそへてとみあまたあ
よあをせくいはゆる黒たどうむう乃小さを此
みいふると此おとくにあれあれる法し
○虫かきろふの古名を阿岐豆やいす書紀神武
卷の末に皇興巡幸因登腋上嘆間丘廻望國狀曰云
云雖内木綿之真進國猶如蜻蛉之醫帖焉由是始有
秋津洲之號と云古事記雄略段よ天皇坐吳床余

○古事記

○果

阿三タコムラキ名ヲ多キニアキツキテフノアラキヒトイニキ
蛸乍御腕即蜻蛉来乍其蛸而飛云々此時御歌云々
せむひける其御歌詞多古羊良余阿羊加岐都岐
曾能阿羊表阿岐豆波夜具比加久能碁登那尔波
牟登蕨良美都夜麻登能久余表阿岐豆志麻登布の
御歌書紀よと異あるところあれど阿岐豆那どみ
此事ハ同トニ本云々と細注あるを全同ト豆那どみ
えてくづりれ二書ともよ阿岐豆に蜻蛉の字を當
て記さまた里万葉ふを蜻蛉乃宮蜻嶋此は長歌に
玉蜻云々と一首の中は同字蜻野蜻領申あど書き
をニウとゆよむべく書り又蛸野とも書り陸奥出羽
ふてえ今も阿岐豆まど
阿計豆とをゆよむとありとぞ

○まことそおあきけのそれおやくだるえてさよをあ
らドとねをさるく古言乃きてゆるを因るわきま
ふはし

○秋津葉余余寶敝流衣吾を著し君も奉者夜も著る
のね万十卷五十八丁
相聞寄衣

前人の説小此秋津葉を蜻蛉比羽のうぶはしれを
ふちふとゆよと云へまど蜻蛉比羽を羅にこそ
またとるつはけまふとまゆべきふあらば
れ乃まのれもふとあろは秋津葉ハ字のどく秋の
葉よて秋の木葉をみぢたふさほふうるをしく

染る衣といふるあるは、後のとあら、飾秋衣の
 衣の色あり、紅葉、黄、青、紅葉、モチリ、紅葉、
 手、紅葉、紅葉、重、紅、紅葉、あどみ、又、そのくさ
 ぐさ、色、あひ、の、か、ま、お、れ、の、書、も、あ、ま、り、
 さ、お、も、ひ、合、を、法、一、万、葉、十、七、卷、に、安、吉、乃、葉、乃、保、
 幣、流、等、伎、余、ま、一、十九、卷、秋、葉、之、余、保、比、余、照、在、惜、身、
 之、ま、一、同、卷、秋、葉、能、黄、色、時、余、と、よ、め、お、に、證、し、て、意、
 得、法、一、秋、津、葉、の、律、乃、に、通、ふ、辞、よ、て、秋、の、葉、を、體、
 之、袖、ふ、る、妹、を、玉、く、し、げ、た、く、お、れ、を、み、た、ま、る、
 吾、君、と、さ、る、も、秋、津、葉、に、染、ぬ、る、う、は、さ、し、た、衣、の、
 吾、君、と、さ、る、も、秋、津、葉、に、染、ぬ、る、う、は、さ、し、た、衣、の、

袖をといふ意と起こえたり。但しこの秋津羽の
 をきあえぬよをあらざれば、衣とて、
 き、並、持、て、と、よ、め、る、ハ、略、解、の、う、も、の、み、て、蜻、蛉、羽、
 見、え、た、る、鏡、の、具、比、比、礼、の、う、も、の、み、て、蜻、蛉、羽、
 形、へ、る、形、を、乃、を、
 上、引、出、さ、る、醫、心、方、和、名、傳、抄、に、注、せ、る、蜻、蛉、の、一、
 名、を、加、太、千、と、云、ふ、は、そ、乃、の、ち、書、ど、も、見、
 あたれば、今の世も然りふところもあふより、さら
 に聞れば、ざる名あるを、袖中抄卷三にかたち乃小
 野の事、浅論する説より、その證、浅考出たるを、
 例乃因ふ云ふは、その件、の、抄、乃、の、ち、の、小、野、乃、

條^ノ。万葉十二卷^丁廿四に。三吉野之蜻乃小野余刈草^ノ之念乱而宿夜四曾多^ヲとある歌を草假字にみたり。野の蜻乃小野にかるのやの云々とうつし書て。頭昭云。蜻をむあきげとらむあり。然まば此歌をむ。何たづの小野とよむ。ほし。うらちの小野を旁^{カタク}その以をれあし。云々と以むて。蜻字をかちとよまむ。こきとなりと。同集一卷^丁十八ある長歌の吉野乃國之^ハ花散相秋津乃野邊余^ニと何れ句をこまも草假字に書て證として。俊頼朝臣の歌云。みよし野のかたち。小野の女郎花。たをまて露よ心れり。是あか

たちの小野と點したる本。小付てよ免るなり。是は三吉野之蜻乃小野とある。蜻字をかちと點し。る本にありて。ちみある。余ありと云へる。ありさて。頭昭も。仙覺たり。およそ五十年。げり。前の人あれ。むあし。論る。万葉に點ハ。仙覺と。前の人。の。みざま。万葉。およみ。をやうく。形。余。能々。見定て。可詠也。一説に付て。よみ。はまむ。む。の。こ。空。に。ある。形。り。かけろふ。乃をの。とらみ。ある。ともあり。それ。も。以。ち。ま。ば。と。以。ま。す。その。の。こ。万葉に。様々の。よみ。を。付。知られ。あ。の。ま。ば。そ。の。の。万葉に。一本に。件の。蜻乃。小野の。蜻字を。か。ち。か。ゲ。ロ。や。よ。免。る。が。何。り。形。也。然。余。も。頭。昭。其。を。蜻。蛉。此。一。名。ある。と。我。知。ら。ざ。り。

○比古表四

○垂

お見えと云ふごとくもとはみよし野のか新續古今
たちお小野にせよみぬへるこせ決し集撰を一目見
集一に源範政今川民部大輔の頃お人あり一目見
かぬちの小野と刈草おほの乃まもれど忘さざら
れむなど見えと云ふ上お攀たる万葉十二卷ある
蜻乃小野余刈草之の歌をそとけたてその蜻をか
夕千と點しと云ふ本にありて二三お句をさへふと
てよまれせり上は攀たる万葉に玉蜻をく一目
見え云々などよめり趣おやたあゆまばこれも顯
もれのけあらかよるり昭然論へゆと同一むるし此一本よて蜻をか夕千
ともよめるまこと此證とほべきなり

天地を袋縫むて云々を以する事

蜻蛉日記安和二年おくぐりにかくものおなぐら年
立のへお朝ふありお々お年頃あやく世の人乃を
る言忌コトイミおどもさぬ所あねぢやのうを何らむと心れ
きて以さり出るまくにいつらあくお人々今年たふ
以うよ言忌して世の中くろみむといふをききて
をらからとねわし人まど卧あうらものきあゆあ
めつち袋袋よぬむてと誦ズするふ以ををのしくおり
てさらに身にも三十日三十夜ミツカミツヨの我をワガとふといをむ

と云へむ。前マヘある人々笑ひて、いさ思ふやうなり。公トキも侍るか。あ、同じくのおまは。茂シゲのくせぬひて、殿ノミヤ兼家トシノカミあやも奉らそぬをぬと。いふよふし。つる人も起て、いとよたそ。空ありてん卦イハ我エハウ方カタも勝マサらむ。わらふわらふ云。牙クハむさあ。のら書て、ちひさき人ヒト綱ツナ道ミチして奉ま。これバ。此頃時の入よて、世中の人ふて、いみづく多く。泰ツキさみより、内へをもとくとて、いとほ。あざいげあり。これどかくぞある。今年を五月ふ。あまをある。陰カゲし。年毎よあまれ。恋う君のた免。うるふ月を。バ。おくるやあるらむ。とあまを。いちひそ。ド。川と思ふ。

此コノくニつりニにあめつち。茂シゲふくろよぬひて、と誦ズした。と。いふ。あ。と耳ミミふとまりて、い。あ。事コトふくと考る。お。あ。は。當ツノ時カミ女メづメ。乃。年トシ始ハジめ誦ズを。ふ。言コト壽ホギ歌カの詞ハありとぞ。た。え。た。る。然シカる。む。女房メカド私記シキと。い。ふ。書モノ。に。卷マク首ウタ。條ジョウ政セイ所ショ様サマの遊アソビ候ケイ。寫シあり。公キミ方カタ様サマ仰オホセに。より。て。伊イ勢セ守シウ殿ノミヤへ。御ミコト傳ツタヘへ。あ。ま。と。と。え。奥ウラ小コ伊イ勢セ祐ユウ和ワ都ツよ。く。寫シ得エて。兼トシノ秋アキ門カド院ノを。東トウ山サン院ノ。天アメ皇ミコの。后キミ宮ミヤ。て。享キョウ保ホ五イ年ネン崩クズレま。き。禁キン中チュウ様サマ女メ中チュウ御ミコト祝イハヒの。次ツギ第ダイ。正マコト月ツキ御ミコト鏡カガミを。ち。む。祝イハヒふ。時トキ。此コノ歌ウタとて。三サン首ウタある。末マタヘに。天アメ地チを。袋フクロ小縫コヌイひて。幸マカシ茂シゲ入イを。て。と。これ。む。ね。も。ふ。と。あ。し。と。ありて。右ミダマの。歌ウタども。三サン首ウタん。よ。む。べ。し。但タダし。この。歌ウタ上ウヘに。け。ふ。より。ハ。我ワレを。もち。ひ。乃ノま。は。の。う。ぐ。み。う。ね。し。き。こと。を。う。つ。し。

○比古婆衣四

○五五

てぞ見ふ。次命とて。位^ヲをまき鏡。年の始。小見。ふそ
うき。しきとあり。けふより。ハ乃歌。後頼朝。臣。永。久
四年。百首の中。乃元日。題。歌。なり。あ。後。よ。み。加。へ。多
ふ。なる。後。し。あ。と。命。と。て。歌。の。あ。は。き。よ。み。さ。ま。ら
り。これ。も。又。後。に。加。へ。た。る。古。き。言。壽。歌。と。き。あ。え。り。地。の。と。見
歌。を。れ。や。ど。う。に。く。古。き。言。壽。歌。と。き。あ。え。り。地。の。と。見
え。た。る。歌。と。ま。よ。て。歌。の。意。を。年。始。小。袋。を。縫。む。て。一
年。此。幸。找。入。ふ。く。ら。し。乃。壽。言。を。る。ぐ。そ。の。み。の。風。俗。
あり。し。乃。乃。今。の。俗。に。女子。の。備。物。ふ。す。る。あ。と。袋。を
あ。る。も。そ。れ。遺。風。あ。る。乃。の。け。り。出。し。た。る。正。し。き。故。實
又。も。あ。ら。で。陰。陽。家。な。ど。の。け。り。出。し。た。る。正。し。き。故。實
し。狭。衣。に。今。姫。君。の。事。找。以。買。る。と。ころ。又。持。き。ま。へ。係
扇。の。う。ち。れ。の。ま。く。ら。り。手。習。を。ら。ま。た。ふ。手。づ。の。ら
の。志。さ。ざ。に。や。と。も。か。し。う。取。見。ぬ。へ。む。あ。ご。を。の。く

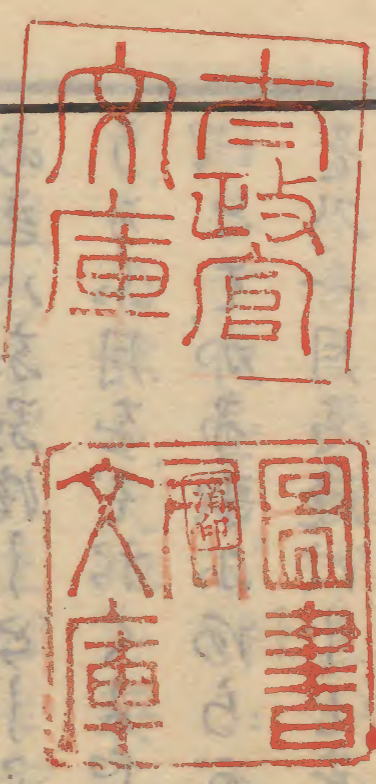
志。う。を。つ。ぐ。あ。ぬ。も。ト。ど。と。乃。以。字。を。さ。あ。く。あ。さ。ま。し
き。さ。ま。あ。ふ。も。何。と。見。と。く。る。う。も。あ。ら。ぬ。を。せ。ち。小。後
を。ま。あ。免。け。ち。を。袋。小。縫。む。て。と。何。あ。ハ。母。代。り。あ。ら
ち。し。た。あ。え。は。壽。言。あ。免。り。と。以。買。る。も。あ。れ。あ。ま
た。天。延。三。年。の。一。條。大。納。言。家。歌。合。に。以。し。あ。ど。り。の。題
乃。右。歌。小。あ。免。つ。ち。乃。袋。の。數。し。れ。や。の。ま。む。た。を。ふ。あ
と。あ。き。今。日。又。も。あ。あ。の。乃。か。の。誦。歌。を。も。と。く。あ。ま。找
え。れ。も。ひ。あ。ち。は。べ。し。又。相。摸。集。小。箱。根。の。社。に。百。首。歌
奉。れ。る。中。に。さ。い。ち。ひ。と。以。ふ。題。よ。て。天。地。乃。神。の。む。ろ
免。む。さ。い。ち。を。找。袋。小。う。き。て。か。へ。り。て。し。の。乃。結。句。か

○比古婆衣四

○五

いづれ箱根の僧が此歌ども返すのとおくよめる歌
ども中より此歌にけあをせてさいを朝日と
よそへて今より都のうとやらむとぞ木もふと
とめるも同一風俗ありけふふよりてと先りとき
こえたまかくて日記のすゝ趣を兼家公の通ひた
まふあと乃夜がまがちあるよあをせて今年ハ三十
日三十夜をこの許モトふ入まむと戯ふひかすたるに
てその歌を天地を袋ふ縫ひて月毎に三十日三十夜
を我をとに入まむとやうに書て道綱朝臣のをさあ
りつるふをよせて夫公セギミ許ふはをうたる我上
れあとむよちつりさあがら書てとひひてその歌

をあるさゝかたをたえしらくあやあせふ書さまあり
さてそのかゝる歌をあるはとて今年を五月ふとい
あまばあふはしとごにあまねふ恋り君がさめ
うるふ月をむねくよああるらむ通曆もて推考ふる
是年五月に閏あ
まともかあ歌ふ何らひて一年内ハ閏月を置て
そ乃一月を逢はすとまらあらむとの意にとみあ
たまゆるなりさてひそとめ祝む損トつよ
て公おあらがひふまけてふははき詞もあねを祝ひ
損トつと思ふとさまをみて書とぐ免とあねもま
これをしらし



比古婆衣四の巻終

伴信友大人著

比古婆衣 初編 一の巻 二編 三の巻 刻成

同三編 五の巻 六の巻 嗣刻

この本乃書は古今集あるを乃を其のりつ喚子鳥のこより志で乃
書をさくつてあるる胡不格校よりべのあまのこをぞ引り
あづのりらるるのこども代妻しく考へ六の巻は續日本紀を撰
まひし中のこども三代実録類聚玉史記とある今其義解集解
三代格政事要畧とあるは三鏡をそのりなり學問よはして要ある
書のこととて成しを考へめされたるを採るれば引よみ書や
ぶんのとくしてんねるること多うる書をなり

嘉永五年壬子全部

江戸

永樂屋文助
紙屋徳八

官許

大坂

河内屋喜多郎
河内屋茂吉
秋田屋右左衛門

文久元年辛酉六月

京都

大文字屋与三吉
丁子屋源次郎
橋屋久吉
越後屋治吉
藤村 伴助
林 芳吉
田中屋治助

二編發兌

料計支大人普

